

タイトル：平成 30（2018）年度 教育セミナー（第 14 回）

日時：2018 年 9 月 13 日（木）～16 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室（303）

「トルコ共和国による対外文化政策——TIKA（トルコ国際協力調整庁）を事例として」
佐々木啓介（東京大学大学院人文社会系研究科 文化資源学研究専攻 修士 1 年）

9 月 13 日から 16 日において、中東☆イスラーム教育セミナーに参加させて頂き、とても充実した 4 日間を過ごすことができました。関係者の方々にはこの文面にて御礼申し上げます。

来年度以降参加を考えるにあたってこの文章を読む皆様を想定し、以下、2 点に分けて感想を述べたいと思います。

①「中東」「イスラーム」を軸に多様な専門領域の先生方、同年代の学生に出会える

これは他の方々の感想にたびたび登場しますが、やはり本当です。（ちなみに今回は、ディシプリンとしては人類学、研究対象としてはオスマン朝を掲げている学生が多い印象を受けました。）私は普段、（大雑把に言えば）文化政策をテーマとしている方々と関わることが多く、人類学や文学などといった耳慣れない領域の発表を拝聴できたのは大変貴重な経験でした。また、私の研究室には「中東」や「イスラーム」に関わる研究をしている方がいないので、そうした共通点で多くの方に出会えたのも良いことでした。

私のように研究室に研究対象に近い先生・学生がいない方、あるいは最近自分のディシプリンだけを考える傾向にあると感じている方は参加されると有益であると思います。

②口頭発表（あるいはポスター発表）にもぜひ応募すべき

こちらもよく言われていることですが、口頭発表を行った修士一年という立場から言及させて頂きます。確かに発表者の大半の方が修士二年以上の方で、先生にも M1 で始めた研究テーマの発表はレアケースだと言われましたが、応募時点で質はともかく 40 分の発表を行えると判断できる場合はぜひとも挑戦するべきだと思います。私の発表内容はとても褒められたものではありませんでしたが、先生方や同年代の方々からの指摘は大変勉強になりました。また、研究対象が似通っていても研究手法が違う方々（その逆も然りだと思います。）には、自分がおもしろいと前提として思っている点もしっかりと明らかにしなければ伝わらないということも身をもって知ることができました。

発表をするメリットというのは、本番の 1 時間強によるものだけではありません。教育セミナーは例年 9 月の中旬に行われているようで、すなわち夏休みの終盤にあたります。発表を一つの目標と据えることで緊張感を伴った夏休みを過ごすことができます。

口頭発表にはまだ難しいという方も今年度からポスター発表が追加されたので、心理的なハードルが下がったと言えるのではないのでしょうか。このどちらかにはぜひとも応募することを強くお勧めします。